

小学校社会科において児童の社会参加意識の

向上を目指した地域学習の構想と実践

－児童の地域社会問題に対する提案内容の分析を通して－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 沼尾 優稀

1. 問題の所在と本研究の意義

内閣府（2024）の調査によると、「社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関与したい」という質問項目に対し、肯定的な回答（そう思う・どちらかといえばそう思う）をした日本の若者（13－29歳）の割合が、諸外国に比べて相対的に低いことが明らかとなった。

また、全国学力学習状況調査質問紙調査の結果（山梨県公立小学校）によると、「地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えることがありますか」という質問項目に対し、肯定的な回答（当てはまる・どちらかといえば当てはまる）をした児童の割合は、平成31年度の調査では62.6%であったが、令和4年度の調査では54.5%にまで低下していることが明らかとなっている。このような結果からも、自ら社会の一員であるという自覚を持ち、望ましい社会の実現に向けて自律的かつ協働的に社会と関わろうとする意欲や態度を育成することが、学校教育には求められていると言える。

社会科教育においては、文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編』の第3・4学年の目標として「地域社会の一員としての自覚」を、第5・6学年の目標として「我が国の将来を担う国民としての自覚」を養うことが求められている。その達成に向けては、唐木（2010）の「社会参加学習」に代表されるような、社会に存在する様々な諸課題を学習者へ提示し、その解決に向けた方策について意思決定し、実際に行動することを求める「提案型の授業」が多数報告されている。しかしながら、社会問題の取り扱いが小学校高学年から段階的に行うべきという意見もあり、小学校中学年を対象として社会問題を扱った提案型授業の実践例は、極めて

少ない現状にある。このような状況を踏まえると、本研究において、小学校中学年の地域学習を対象とし、学習者に身近な地域社会に存在する社会問題を主教材として扱った授業を構想、実践することは意義あるものと考えられる。

2. 本研究に関連する先行研究の状況

2-1. 本研究における「社会参加意識」の考え方

棚橋・木村（2022）は、社会参加を「社会の一員としての意識を持って、自らの幸福の実現や、望ましい社会づくりのために自律的かつ協働的に社会と関わること」と定義している。本研究では、この定義を援用し、社会参加意識を「地域社会の一員としての意識を持って、自らの幸福の実現や、望ましい地域社会づくりのために、自律的かつ協働的に地域社会と関わろうとする意欲や態度」とすることとした。

2-2. 「社会参加学習」の検討

「社会参加学習」とは、唐木（2010）が提唱する学習論である。唐木は、社会参加学習の成立条件として5つの条件を示している（表1）。

表1 社会参加学習の必要条件

①	地域社会の課題を教材化すること
②	プロジェクト型の学習を組織すること (問題把握→問題分析→意思決定→提案・参加)
③	振り返りを重視すること
④	学問的な知識・技能を習得、活用する場面を設定すること。
⑤	地域住民との協働を重視すること

この5つの必要条件の中で、特に議論されているのが、「②プロジェクト型の学習を組織すること」である。唐木は学習の流れとして、【問題把握→問題分析→意思決定→提案・参加】を提唱しているが、学習の最終段階として「提案・参加」を位置づけることについては、賛否の両論が存在する。例えば橋本（2012）は、社会問題についての提案・参加にまで踏み込んだ学習は、「限られた社会問題の、体系的でない社会認識による学習」であり、これらの授業が態度主義や行動主義を自己目的化すると、道徳や総合的な学習の時間との差異が見出せなくなると指摘している。また唐木自身も、「提案・発表の場（時間・空間・シチュエーション）の確保、時間数の確保、諸費用の工面等、活動的な授業に付随する配慮も必要」と指摘している。

以上の点を踏まえ、本研究では、唐木の提唱する5つの必要条件を土台としつつも、学習の最終段階には「提案」を位置づける地域学習を構想し、学習者の社会参加意識の向上を目指す。

2-3. 先行実践の検討

星野・鶴沼（2018）は、学習者の「社会参画力」の育成を目的として、提案型授業の授業構成を明らかにするとともに課題を析出し、その解決を図る新しい授業構成を構築している。それを第4学年の地域学習へ取り入れ、「提案型社会参画学習」として再構成し、実践及び分析を行うことを通して、学習者の社会参画力の高まりを検証している。

成果として、これまでなされてこなかった提案型授業の授業構成を整理し、それを生かした提案型授業の有効性及びその必要性を示したことが挙げている。一方で課題としては、研究の課題設定及び分析方法を挙げている。特に授業実践の分析においては、質問紙調査の質問項目の検討が不十分であったと評価し、分析方法の十分な検討が今後の課題であると指摘している。

星野・鶴沼の実践は、先行実践の少ない小学校中学年の地域学習を対象として、社会問題に対する提案型授業を構築した点で評価することができる。一方で、分析方法が児童の発言や振り返

りによる分析であり、児童1人1人の具体的な提案内容の分析は行われていない。また星野・鶴沼の実践は、活動の計画や運営の段階から加わる「参画」を対象とした実践であるのに対し、現に存在している活動に加わることを指す「参加」を対象とした実践は管見の限り見当たらない。

よって本研究では、小学校中学年の児童に適していると考え「参加」に焦点を当てた実践を行うとともに、社会参加意識の変容の分析方法として、児童の地域社会問題に対する提案内容の分析を行う。

3. 研究目的と RQ（リサーチクエスション）

3-1. 研究目的

本研究の目的は、小学校社会科の地域学習において、児童に身近な地域社会の問題を主教材として取り扱った授業を構想、実践することを通して、以下のリサーチクエスションを検証することである。

3-2. RQ（リサーチクエスション）

- ① 本実践によって、児童の提案内容は実現性の高いものへと変化するのか？
- ② 本実践によって、児童の社会参加意識は向上するのか？

4. 本研究で取り扱う地域社会問題

本研究では、山梨県の伝統行事である「甲斐国一宮浅間神社例大祭大神幸祭（おみゆきさん）」と、山梨県指定の無形民俗文化財である「山梨岡神社の太々神楽」のそれぞれが抱える課題を、「地域社会問題」として教材開発することとした。以下に、それぞれの教材の概要を整理する。

4-1. 「甲斐国一宮浅間神社例大祭大神幸祭」

甲斐国一宮浅間神社例大祭大神幸祭とは、山梨県笛吹市一宮町の甲斐国一宮浅間神社の例大祭であり、地域住民などからは「おみゆきさん」と呼ばれる伝統行事である。起源は、825年頃に甲府盆地を襲った大水害後に始まった水防祈願であり、現在に至るまで山梨県内の3つの神社の神輿が釜無川沿いまで渡御している。

約 1200 年以上の歴史がある「おみゆきさん」ではあるが、近年は一宮浅間神社のある笛吹市一宮町の人口減少が急速に進んだことにより、行事に参加する地域住民の数が減少している。加えて、行事の日程は神社の祭日として決定しているため、祭日を週末や祝日に移動させることができず、平日の場合は行事参加者がより少なくなるという。

4-2. 「山梨岡神社の太々神楽」

山梨岡神社の太々神楽とは、山梨県笛吹市春日居町にある山梨岡神社で毎年 4 月 4 日と 5 日に披露される神楽である。起源は、甲斐国の戦国大名であった武田信玄公の出陣に際して、戦勝祈願のために奉納されたことであり、「武田信玄出陣の舞」とも呼ばれる。現在に至るまで、24 種類の舞が伝承されており、舞の形や披露される順番は今もなお変わっていない。その歴史が評価され、昭和 42 年に山梨県の無形民俗文化財に指定されている。

今日に至るまで、神楽の舞子集団によって保存・継承されているが、メンバーの高齢化が進み、若者の舞子が集まらないことが大きな問題となっている。

4-3. 教材開発の観点

第一に、研究対象校の地域にある社会問題を選択した点である。これは唐木の提唱する社会参加学習の必要条件の①に該当する。取り上げる 2 つの教材は、それぞれ研究対象校の地域において、保存・継承されてきた伝統行事及び文化財が抱える問題である。学習者にとって身近な地域社会に存在する問題を取り上げることによって、児童の中に「解決する必要がある問題だ」という切実感を持たせる意図がある。

第二に、自治体や企業、地域住民などが一体となって解決に向けた取り組みを実施している社会問題を選択した点である。児童が未だ明確な解決策が提案されていない社会問題であると認識することによって、解決策を提案することの意味を実感するとともに、学習意欲が高まる可能性を考えたためである。

5. 実践の概要と状況

5-1. 対象校と対象児童

山梨県内の公立小学校第 4 学年 21 名

5-2. 事前質問紙調査の結果より

実践に先立ち、対象児童の地域認識および社会参加意識の実態を明らかにすることを目的に、分析対象者 18 名に対して、事前の質問紙調査を実施した。質問項目（表 2）と、児童の回答状況（表 3）を以下に示す。また、回答項目は「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「思わない」の 4 つを設定した。

表 2 事前調査の質問項目

項目	質問内容
①	わたしは自分の住んでいる地いきのことがすきだ。
②	わたしは地いきのれきしや文化、行事などに興味がある。
③	わたしは自分の地いきのために、何かを考えたり、行動したりしてみたい。
④	わたしは自分の住んでいる地いきの行事などによく参加している。

表 3 事前調査の回答状況

項目	そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	思わない
①	17	1	0	0
②	11	6	1	0
③	9	8	1	0
④	5	6	6	1

質問項目①・②・③の結果より、対象校の児童は、地域に対する興味・関心が高く、また地域のために考え、行動することに対しても関心が高いことが分かる。

一方で、質問項目④の結果より、地域行事などへ参加する児童は少なく、地域に対する関心の高さと実際の行動意識が結びついていない実態があると推察される。

5-3. 単元の指導計画（全10時間）

(1) 単元名「地域に受けつがれてきたもの」

(2) 単元の目標

- ① 地域の伝統と文化について、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめることができる。（知識・技能）
- ② 地域の伝統や文化が抱える課題について、単元を通して学習したことを踏まえて分析するとともに、その解決に向けた手立てについて考えることができる。（思考力、判断力、表現力等）
- ③ 地域の伝統や文化が抱える課題に向き合い、その解決に向けた手立てについて単元を通して意欲的に追究することができている。（主体的に学習に取り組む態度）

(3) 単元の指導計画（全10時間）

次	時	ねらい	問い（めあて）と主な学習活動
第1次	1	山梨県内の主な伝統行事の名称や位置を理解している。	問：山梨県には、どのような伝統行事があるのだろうか？ ① 県内にある主な伝統行事の名称と位置について調べる。
	2	おみゆきさんへの疑問を出し合い、学習問題を見出している。	問：おみゆきさんとは、どのような行事なのだろうか？ ① 写真や映像から、行事の様子を知る。 ② 行事に対する疑問を整理し、学習問題を設定する。
		おみゆきさんとはどのような行事で、なぜ長く続いているのだろうか？	
	3	おみゆきさんの概要と歴史を理解している。	問：おみゆきさんに込められている願いとは何だろうか？ ① 行事に込められている願いとは何か予想する。 ② 行事の由来や起源について調べてまとめる。
	4	おみゆきさんが長く続く背景には、地域の人など様々な人々の支えがあることを捉えている。	問：おみゆきさんは、なぜ発展していったのだろうか？ ① 伝統行事として発展した理由を予想する。 ② 行事を支える地域住民などの役割について話し合う。
	5	おみゆきさんの継承に向けた取り組みと課題を理解している。	問：おみゆきさんを残すためにはどうすればいいのだろうか？ ① 主催者の人の話から、行事が抱える課題を知る。 ② 保存・継承していくための解決策を提案する。
第2次	6	学習を振り返り、学習問題への考えをまとめている。	めあて：学習問題について考えよう！ ① 調べたことを振り返り、学習問題への考えをまとめる。
	7	山梨県にある国宝などの文化財の名称と位置を理解している。	問：山梨県には、どのような文化財があるのだろうか？ ① 山梨県にある5つの国宝の名称と位置を調べる。
	8	太々神楽の概要と歴史について理解している。	問：太々神楽とは、どのような文化財なのだろうか？ ① 太々神楽がどのような文化財なのかを調べる。 ② 主催者の方のお話を聞き、文化財の抱える課題を知る。
	9	おみゆきさんと太々神楽の継承に向けた解決策を考えている。	① それぞれの行事・文化財の課題を整理する。 ② 追究課題を知り、解決策を考える。
		「地いきに受けつがれてきたもの」を残していくためのかい決さくをてい案しよう	
	10	自分の解決策を発表している。	めあて：解決策を発表しよう！ ① 自分の考えた解決策を提案する。

5-4. 提案の具体化に向けた工夫

(1) 社会問題について繰り返し考える単元構成
本実践では、単元を2次構成とした。

第1次では、おみゆきさんを取り上げる。児童は、行事の歴史や保存・継承に向けた取り組みについて調べていく中で、保存・継承には問題があることを認識する。それを受けて、5時間目に解決策を考え、提案する。

第2次では、太々神楽を取り上げる。児童は、文化財の歴史や保存・継承に向けた取り組みについて調べていく中で、おみゆきさんと同様に、保存・継承には問題があり、どちらの伝統行事・文化財も「少子高齢化による担い手や参加者の不足」が問題であると認識する。それを踏まえ、最終的におみゆきさんと太々神楽を保存・継承していくための解決策を提案し、発表する。

このように、単元を2次構成として、解決策を繰り返し考案できるよう工夫することで、児童が第1次における自分の提案内容を絶対視せず、より良い提案内容を考案することができるように工夫した。

(2) インタビュー動画の活用

第1次の5時間目において、おみゆきさんを主催する方へのインタビュー動画を、第2次の9時間目において太々神楽を主催する方へのインタビュー動画を活用した。それぞれの伝統行事・文化財が抱える課題について、主催者の方から映像を介して直接伝えてもらった。児童が課題の解決を自分事として捉えることができるようになること、解決策を考える意欲を向上させることを意図して活用した。

(3) 地域住民のジレンマ課題の提示

第2次の9時間目において、地域の伝統行事及び文化財を保存・継承していく人たちが抱えるジレンマ課題を提示し、学級全体で議論した。

「保存・継承していくために、古くから受け継がれている祭日や行事の進行方法を変更することは良いか良くないか」と児童に問うことで、児童が第1次で考えた自分の解決策を見直し、より良い解決策を考案することができるように工夫した。

6. 結果

リサーチクエスションの検証に向けて、以下の3つの調査を実施した。以下にその調査結果を示す。

6-1. 1次及び2次での児童の提案内容と変化

分析対象となった児童15名の中で、第1次と第2次における提案内容の変化が分かりやすい児童6名の提案内容を以下に示す(表4・5)。

表4 第1次における児童の提案内容

児童名	第1次における提案内容
A	よびかけ。
B	人をふやす。
C	人をよぶ。だれでもいいからよぶ。
D	ポスターをつくって町中にはる。
E	やる日をかえる。
F	平日ではなく、毎週土曜日にやる。

表5 第2次における児童の提案内容

児童名	第2次における提案内容
A	<u>市や県に協力してもらって、ポスター、よびかけ、広告を出してもらう。</u>
B	人をふやすためにポスターを書いて市や県にはる。 <u>ポスターはしやくしょの人に</u> <u>かいてもらう。</u>
C	自分でできることをやってみる。例えば、 <u>ポスターを作ってみたり、チラシにのせて</u> <u>みたりする。自分でできることがいっぱい</u> <u>あるからやってみる。</u>
D	<u>実際におどっている写真と貼紙や内容な</u> <u>どを貼ったりして、町の人から見てもら</u> <u>う。しんぶんもつくる。おたよりをつくる。</u>
E	ボランティアやルール、 <u>たとえば地域で若</u> <u>い人はお祭りに参加してもらうというル</u> <u>ールを作ったらどうでしょうか。</u>
F	<u>ぼくは祭りの日という日を作った方がい</u> <u>いと思いました。なぜなら、人が集まると</u> <u>思いました。その祭りの日は、市役所の人</u> <u>に相談して作った方がいいと思います。</u>

下線部は提案が具体化したと思われる部分

6-2. 事後の質問紙調査の結果

授業実践前後での児童の社会参加意識の変容を検証することを目的に、授業実践後に質問紙調査を実施した。質問項目①から③は事前調査と同様のものを設定し、事前及び事後での回答状況の変化を示した（表7）。質問項目③ - ①を新たに記述項目として設定した。質問項目③ - ①における一部の児童の記述を示す（表8）。

表6 事後調査の質問項目

項目	質問内容
①	わたしは自分の住んでいる地いきのことがすきだ。
②	わたしは地いきのれきしや文化、行事などに興味がある。
③	わたしは自分の地いきのために、何かを考えたり、行動したりしてみたい。
③ - ①	そのように考えた理由を教えてください。

表7 事後調査での児童の回答状況（18名）

	そう思う	少し そう思う	あまりそう 思わない	思わない
①	17	1	0	0
②	8（-3）	9（+3）	1	0
③	8（-1）	6（-2）	4（+3）	0

（）内は事前調査からの人数の増減

表8 項目③ - ①に対する児童の記述内容

回答	児童の記述内容
そう思う・少し そう思う	お祭りの課題があることを知って、自分に何ができるか。
	行動や考えたりしないとおみゆきさんみたいに長い歴史が終わってしまったりするから。
	どういう行動をすればいいのか地いきの人にきいていろいろ行動したいです。
あまり そう 思わない	何を行動すればいいか分かりません。
	あまりそういうのがやったことがないから。
	今でもけっこういいけど、できることはやりたい。

6-3. 児童の学習感想の分析

第1次及び第2次終了時における児童15名の学習感想を、「①社会問題に対する関心がみられる記述」、「②地域行事等への参加意欲がみられる記述」、「③授業内容への興味関心がみられる記述」の3つに分類した。以下に、第1次と第2次での分類ごとの記述数の変化を示す（表9）。

加えて、第2次終了時における一部の児童の記述内容を示す（表10）。

表9 第1次・第2次での分類ごとの記述の数

分類	第1次	第2次
①	2	4
②	6	2
③	7	9

表10 分類ごとの第2次学習感想の記述

分類	児童の記述内容
①	おみゆきさんや太々神楽はかだいをかかえていることがわかったから、自分にも何ができるか考えてみたい。
	おみゆきさんは、最初は何も知らなかったけど、どんどんわかっていって、とっても興味を持ちました。太々神楽もおみゆきさんも、まさか人が少ないのが、どっちも問題だったとはびっくり。
②	おまつりにさんかしてみたいです。
	1200年前からずっとつづいてきた伝統とかを知れて楽しかったです。おみゆきさんや太々神楽を知ってから、ほかのお祭りのことについて知りたくなりました。いつかおみゆきさんと太々神楽のお祭りに行ってみたいくなりました。
③	もっとおみゆきさんのことや、太々神楽のことを知りたい。
	山梨県の伝統行事がこんなにあると思ってびっくりしました。川中島合戦はもちろん知っていましたが十日市や吉田の火祭りのはじめて知りました。

7. 考察

調査結果及び分析結果より、リサーチクエストに対する検証結果について考察する。

7-1. リサーチクエスト①の検証

RQ①「本実践によって、児童の提案内容は実現性の高いものへと変化するのか？」は、支持されたと考える。

その根拠としては、分析対象者である児童 15 名全員の提案内容が、第 1 次から第 2 次にかけて、具体性・実現性のある内容へと変化していたことが挙げられる。

結果で取り上げた児童 A～F の第 1 次における提案内容は、児童 A の「よびかけ」や、児童 D の「ポスターをつくって町中にはる」のように、「だれが・どのように」という部分が欠けていて、具体性・実現性のある解決策とは言えない。

しかしながら、第 2 次の提案内容では、児童 A の「市や県に協力してもらって、ポスター、よびかけ、広告を出してもらおう」や、児童 D の「実際におどっている写真と貼紙や内容などを貼ったりして、町の人から見てもらう。しんぶんもつくる。おたよりをつくる」のように、提案内容の具体性及び実現性が高いものへと変化していることが分かる。

このような提案内容の変化の要因を具体的に考察することはできない。しかしながら、第 2 次の 9 時間目において、地域の伝統行事・文化財の保存・継承に取り組む人々が抱えるジレンマ課題について活発に議論することを通して、第 1 次での自分自身の提案内容を見直そうとする児童の姿や、地域の伝統行事および文化財の保存・継承に向けた取り組みを行っている外部人材の方のお話に耳を傾けたりする姿がみられた。

このことから、地域社会問題について繰り返し考えることができるような単元構成としたことや、地域社会問題の解決が喫緊の課題であるという切実感を持つことができるように、外部人材の方へのインタビュー動画を活用したことが、児童の提案内容の具体化につながったと推察される。

7-2. リサーチクエスト②の検証

RQ②「本実践によって、児童の社会参加意識は向上するのか？」は、一定の成果は得られたものの、明確に支持することはできないと考える。

その根拠としては、事後調査の質問項目③「わたしは自分の地いきのために、何かを考えたり、行動したりしてみたい。」に対し、肯定的な回答（そう思う・少しそう思う）をした児童の理由に、「お祭りの課題があることを知って、自分に何ができるか。」や、「どういう行動をすればいいのか地いきの人にきいていろいろ行動したいです。」という記述がみられたことが挙げられる。

また、第 1 次及び 2 次終了時の学習感想の分析結果より、「①社会問題に対する関心がみられる記述」の数が、第 1 次の時に比べて、若干ではあるが増加したことも根拠の 1 つとして挙げられる。加えて、「おみゆきさんや太々神楽はかだいをかかえていることがわかったから、自分にも何ができるか考えてみたい。」という記述のように、自分にできることを見出そうとする記述もあり、本実践によって、一定の社会参加意識の高まりはみられたと言える。

一方で、支持されないとする要因としては、事前及び事後の質問紙調査の質問項目②「わたしは地いきのれきしや文化、行事などに興味がある。」と、質問項目③「わたしは自分の地いきのために、何かを考えたり、行動したりしてみたい。」という 2 つの項目において、肯定的な回答（そう思う・少しそう思う）をした児童の数が、事前調査に比べて減少した点が挙げられる。

また、質問項目③において、否定的な回答（あまりそう思わない）をした児童の理由記述に、「何を行動すればいいか分からないです。」「今でもけっこういいけど、できることはやりたい。」という記述がみられたことが挙げられる。

このように、質問紙調査において、肯定的な回答をした児童数が減少したことや、質問項目③ - ①において否定的な理由記述がみられた要因としては、身近な地域に存在する社会問題の複雑さを強調した結果、児童が解決することの難しさを実感した可能性があると推察される。

8. おわりに

本研究では、児童の社会参加意識を高めることを目的として、唐木清志（2010）の社会参加学習の5つの必要条件を参考に、研究対象校及び対象児童に身近な地域に存在する地域社会問題を主教材として扱った地域学習を構想し、実践した。以下に、本研究における成果と課題をそれぞれ述べる。

8-1. 成果

本研究における成果としては、次の2点を挙げることができる。

1点目は、「解決策について繰り返し考える単元構成としたこと」、「地域社会問題が内包するジレンマ課題を提示したこと」、「地域社会問題の解決が喫緊の課題であると外部人材に伝えてもらったこと」などを要因として、単元前半部分から後半部分にかけて、具体性・実現性のある提案をする児童が多数確認された点である。

2点目は、事前及び事後の質問紙調査の結果分析と、第1次及び第2次終了時における児童の学習感想の分析から、第1次と第2次、授業実践前後において、社会参加意識の向上がみられる児童を確認することができた点である。記述項目では、地域社会と積極的に関わろうとする意欲がみられる記述も確認することができた。

8-2. 今後の課題

今後の課題としては、次の2点が挙げられる。

1点目は、事後の質問紙調査において、社会参加意識の低下がみられるような回答をする児童が確認された点である。今後は、児童の提案内容に対して、外部人材から児童の提案内容に対するフィードバックをもらう時間を設定するなどして、児童の有効感を高める指導が必要となる。

2点目は、本研究の分析方法についてである。10時間の授業実践のみで、対象児童の社会参加意識の変容を検証することには限界がある。今後は、授業実践後の児童が地域とどのように関わっていくのかという部分まで追跡するような調査を実施する必要がある。

謝辞

本研究を遂行する上で、取材及び資料提供にご協力いただいた笛吹市役所文化財課の皆さま、甲斐國一宮浅間神社の皆さま、山梨岡神社太々神楽の舞子の皆さまに厚く御礼申し上げます。

そして、ご指導いただいた実習校の先生方に心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 紙田路子（2008）「市民的資質を育成する小学校社会科授業の設計－『正統的周辺参加論』を手がかりに」『社会科研究』（69）：21－30
- 唐木清志（2008）『子どもの社会参加と社会科教育』東洋館出版社
- 唐木清志（2010）ほか『社会参画と社会科教育の創造』学文社
- 国立教育政策研究所「令和6年度全国学力・学習状況調査の調査問題・正答例・解説資料について」<https://www.nier.go.jp/24chousa/24chousa.htm>（参照日：2025年2月3日）
- 小西正雄（1992）『提案する社会科－未来志向の教材開発－』明治図書
- 棚橋健治（2022）ほか『社会科重要用語辞典』明治図書
- 内閣府（2024）『令和6年版子ども白書（全体版）』
- 橋本康弘（2012）「社会科における社会参加」社会認識教育学会『新社会科教育学ハンドブック』明治図書
- 星野・鶴沼（2018）「社会参画力を高める社会科授業に関する研究」『福島大学総合教育研究センター紀要』25：33－40
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編』東洋館出版社